

オーガナイザー：稲葉 一郎（薬局セントラルファーマシー長嶺）
座長：萬谷摩美子（医療法人愛和会 愛和病院）
今村 光一（医療法人社団 鶴友会 鶴田病院 薬剤部）

S4-1 がん患者の非がん性痛について—何でもがんのせい？—

山田 武志（飯田市立病院 緩和ケア内科）

S4-2 薬局薬剤師が関わるがん患者の非がん慢性痛治療の実際と問題点

天方 奉子（薬局セントラルファーマシー長嶺）

S4-3 オピオイド鎮痛薬の適正使用を考える～痛みのアセスメントの重要性～

金子 健（慶應義塾大学病院 薬剤部/慶應義塾大学病院 緩和ケアセンター）

S4-4 がん患者の非がん慢性痛に対するリハビリテーションの実際～理学療法を中心に～

島田 武仁（地方独立行政法人 長野市民病院 診療技術部 リハビリテーション科）

オーガナイザーの言葉

がんの早期発見、がん医療の進歩、および治療成績の向上により、がん患者全体の5年生存率が1997年62.0%から徐々に増加し、69.4%（2017年2月国立がん研究センター発表）まで上昇しています。がん患者の療養期間は長期化し、オピオイド鎮痛薬の使用も長期にわたる傾向にあります。また、療養中に、がんによるもの以外の慢性痛を併発する患者も多く、これらに対する疼痛治療もがん性疼痛治療と並行して行われ、中には、がん性痛と同様にオピオイド鎮痛薬により治療されているケースがあるようです。オピオイド治療薬を適正使用するにあたり、様々な問題が浮かび上がっています。

一方、2010年1月にフェンタニル貼付薬が非がん性の慢性痛に対する適応を取得して以降、オピオイド鎮痛薬による治療が普及し、オピオイドの乱用や依存、嗜癖といった、いわゆるケミカルコーピングを含めた問題について議論される機会が増えています。身体的・精神的・社会的・スピリチュアルな苦痛と向き合っているがん患者の長期療養においても同様の懸念があり、鎮痛目的ではない不適切なオピオイド鎮痛薬の使用には注意を払う必要があります。

本シンポジウムでは、専門の医師から慢性痛治療全般について、理学療法士から非がん慢性痛に対するリハビリテーションの実際について学び、がん患者の非がん慢性痛治療について、薬物治療以外の治療も含めて多角的に考えたいと思います。また、現場の薬剤師が直面しているがん患者の非がん慢性痛治療の問題点を共有するとともに、疼痛緩和の薬物治療における薬剤師の役割について確認したいと思います。がん患者のあらゆる痛みの緩和、QOLの向上に向けて、薬剤師として今一度、オピオイド鎮痛薬の適正使用について考える機会となれば幸いです。